

「建築する身体」と「ランディング・サイト」

三 村 尚 彦

“Architectural Body” and “Landing Sites”

MIMURA Naohiko

This paper has been written with the aim of making clear the key concepts “architectural body,” “reversible destiny,” and “Landing Sites”, in *Architectural Body* by modern artists Shusaku Arakawa and Madeline Gins.

In the past, people have been understanding these concepts through experiencing installations and architectural structures by Arakawa and Gins, or based on their lectures. Our understanding of these concepts in this research, however, is mainly based on the interpretation of the text, *Architectural Body*.

In this paper, we discussed the following three propositions: 1) “Architectural body” means a function through which the organisms generate the world by their own acts; 2) The concept of “Reversible destiny” that insists on human immortality can be obtained through the function of architectural body when the environment and humans in that environment are re-created and re-defined; 3) Arakawa and Gins use a technical term “Landing Sites” in order to study phenomena where the world emerges as a meaningful field for the organisms.

We support these three propositions through understanding the text of *Architectural Body*.

キーワード：荒川修作 (Shusaku ARAKAWA)、マドリン・ギンズ (Madeline Gins)、
建築する身体 (Architectural Body)、天命反転 (Reversible Destiny)

はじめに 荒川+ギンズからギンズ+荒川へ

現代美術家の荒川修作（1936-2010）は、1961年単身渡米し、マルセル・デュシャンらと交流を深めるとともに、生涯のパートナーとなる詩人のマドリン・ギンズ（1942-2014）と出会い、ニューヨークで独自の創作活動を開始する。荒川とギンズ（以下、荒川+ギンズと略記）は、図式絵画とテキストで構成された『意味のメカニズム Mechanismus der Bedeutung』（1971年初版ドイツ語版、日本語版は1979年）を発表し、実験的哲学的な作品として高い評価を受け、以来、アメリカ、ヨーロッパの現代アートシーンを中心に活躍した。1997年6月グッゲンハイム美術館で日本人として初めて個展を開催し、カレッジ・アート・アソシエーション賞を受賞。一連の芸術表現活動から、荒川は1982年紺綬褒章、1988年ベルギー批評家賞、2003年紫綬褒章および第10回日本現代藝術振興賞、2010年旭日小綬褒章などを受けた。後年、荒川+ギンズは、彫刻や絵画から、インスタレーション作品を経て、「天命反転 reversible destiny」という独特の概念を提唱しながら、「建築」へとその創作活動を移行させていく。天命反転とは、「人は死ななくなる」という主張である。これは、非常にインパクトの大きいものだが、同時に「不可解」（場合によっては「怪しい」）という印象を呼び起こす概念だろう。また、「天命反転」と密接につながっている「建築する身体 Architectural Body」という語¹⁾も、荒川+ギンズに特徴的なものである。従来、これらの語は、「遍在の場・奈義の龍安寺・建築する身体」（1994）、「養老天命反転地」（1995）「三鷹天命反転住宅 In Memory of Helen Keller」（2005）など荒川+ギンズの建造物に（およびその建物の体験に）もとづいて、理解されてきたように思われる。例えば、三鷹天命反転住宅に一步足を踏み入れると、14の色を施された室内、でこぼこの波打つ床、球形の書斎、これまで体験したことのない空間とその感覚に、人は刺激され、住環境と身体との相互作用を意識することになる。NHKで放映された番組『あの人に会いたい』のナレーションによれば、荒川は、

普段は使わない身体感覚を徹底的に目覚めさせ、人間本来の可能性を引き出す。そうした中で、今の価値観を疑い、本当に生きやすい世の中を感じ取る人間が生まれることを願った。²⁾

1) いささか煩雑になるが、建築する身体を概念として表記するときは、「建築する身体」、著書を指す場合は『建築する身体』としている。

2) NHK『あの人に会いたい』ファイルNo.372。2013年度放映。http://www.nhk.or.jp/archives/people/detail.html?id=D0016010372_00000を参照。

のである。そして、番組の最後に荒川は次のように述べている。

コペルニクスの21世紀版とってくれたら。それによって何が変わるかっていうことは、どうぞあなたの体で試してくださいっていうのが、いちばんプリミティブで、いちばん簡単なんだよ³⁾。

身体を動かす。その動きで自分の身体を感じ、同時に、身体を取り巻く周囲を感じる。その感じが、再びわたしに影響を及ぼす。それを通じて、わたしと住空間の両方が、再構築されていく。「建築する身体」とは、こうした事態を意味していると思われる。自分の身体で試すことが、一番プリミティブで明白な方法であり、これが荒川のやり方である。

しかし、「建築する身体」に対する理解の仕方、アプローチには、もう一つ別のものがあると考えられる。それは、詩人でもあるギンズのやり方、すなわち言葉・テキストをとおして理解することである。著書『建築する身体』は、もちろん Madeline Gins and Arakawa の2人が著者である。しかし、ギンズの単著である *Helen Keller or Arakawa, 1994*⁴⁾ の文章や使用しているテクニカルタームをふまえるならば、『建築する身体』の大部分は、主にギンズによって執筆されたものと考えられる⁵⁾。ギンズが著した *Architectural Body* というテキストは、非常に難解である。河本英夫による邦訳⁶⁾ が出版されているが、ギンズ+荒川⁷⁾ の独特な用語や言い回しの訳しがたさ、また翻訳出版にまつわる時間的な制約もあったようで、日本語訳のみでギンズ+荒川の思想に迫るには、かなりの困難が伴うものと思われる⁸⁾。それゆえわれわれは、『建築する身体』という著書が、またその中で主張されている諸概念、たとえば「ランディング・サイト

3) 同上

4) Madeline Gins, *Helen Keller or Arakawa*, Burning Books, 1994、邦訳『ヘレン・ケラーまたは荒川修作』、渡部桃子訳、2010年、新書館。

5) オーストラリアの建築学研究者ラッセル・ヒューズは、『建築する身体』序文・イントロダクションを執筆していたギンズをサポートしたと証言している（著者とヒューズとの私信にもとづく）。

6) 『建築する身体 人間を超えていくために』河本英夫訳、春秋社、2004年（ジャン＝ジャック・ルセルクルによるフランス語版序文を増補した新版は2008年）。

7) 以下では、原著の著者名順に従う。また著書ごとに、筆頭著者は変更されている。例えば、Shusaku Arakawa and Madeline Gins, *Mechanism of Meaning*, Abbeville Pr.3 Sub, 1989 や Arakawa and Madeline Gins, *Architecture: Sites of Reversible Destiny: Architectural Experiments After Auschwitz-Hiroshima*, St Martins Pr.1994など。

8) したがって本稿における『建築する身体』からの引用は邦訳とともに、いささか冗長な印象を与えるかもしれないが、英語原文を併記する。

landing sites」「バイオスクリーブ bioscleave」といった語が、非常に特殊なことを述べているような印象をもってしまう。

私見では、ギンズ+荒川は、われわれの周囲的な環境、住空間のうちでわれわれがたえず知覚し、感じていることを丹念に記述し、建築とそのなかで活動する有機体（人間）について、これまで気づいてこなかった関係や機能を提示している、と考えられる。そのことを、本稿はギンズ+荒川『建築する身体』を精密に読解することによって示していきたい。実際、これまで日本の荒川+ギンズについての先行研究において、『建築する身体』の詳細なテキスト研究は行われてこなかったと思われる（荒川+ギンズ論において引き合いに出されるテキストは、荒川の講演や対談がほとんどであった）。『建築する身体』を徹底的に読み込むこと、それが本論考の課題であり、かつ筆者が当面、継続的に取り組もうとしている仕事である。簡潔に言えば、ギンズ+荒川の著書『建築する身体』をわかりたい読者のために、ガイドブックを提供することが、本稿を手はじめとして継続されていく研究の目的⁹⁾である。言い過ぎを覚悟でもう一つ言えば、荒川研究ではなく、ギンズ研究を行うことと表現してもいいかもしれない。

本稿では、「天命反転」と「建築する身体」が、どのようにつながっているのか、また『建築する身体』で論じられている「ランディング・サイト」とはいかなる概念であるのか、この2つを最初の問いとして取りあげていく。『建築する身体』の該当箇所を追いながら、われわれの具体的な体験の記述もふまえて、一定の解答を提示していきたい。

1 家あるいはゴミの山

『建築する身体』第3章「仮説としての建築 Architecture as Hypothesis」は、奇妙で、現実離れした会話、ギンズ、アラカワ、ロバート、アンジェラの4人の会話で始まる。ギンズとアラカワが、アンジェラとロバートを家に案内するという設定である。しかしその家は、ゴミの山にしか見えない代物であった。

9) こうした研究態度に対して、一定の批判が寄せられることは自覚している。すなわち、荒川+ギンズ思想は、論理的思考にもとづいて合理的に解釈することによっては捉えられない、それどころか、荒川+ギンズ思想の矮小化すら引き起こしてしまう、といった批判である。もちろん論理を超えた言説に、荒川+ギンズの魅力の一つがあることは間違いないだろう。しかし、それにのみ限定して理解しようとするのもまた、バイアスのかかった態度ではないだろうか。論理的な一貫性、合理性にもとづいて、彼らの思想を読み解いていく作業にも、少なくともは意義があると思われる。論理による説得は、荒川+ギンズの考えが普遍的に受け入れられる基盤を形成することにつながるからである。本論考はそうした試みとして提出されている。

アラカワ：あなた方に話していた家が、これです Here is the house we were telling you about.

アンジェラ：家など見当たらないですけど I don't see any house here.

— 中略 —

ロバート：この山ですか？ This heap?

ギンズ：ええ、このあたり一帯を覆っているなだらかな山、物品の山です Yes, a low pile of material that covers a fairly vast area.

アンジェラ：わたしたちはゴミの山にいるの？ あたり一帯を覆っているこの低い山？ Are we at a dump? This low pile covering a vast area.¹⁰⁾

この家、すなわちゴミの山の大きさは、高さ3インチ（7.5cm）から11インチ（27.5cm）、面積は2400平方フィート（220m²）、中庭を含めると2900平方フィート（270m²）になるとされている。4人は、この「家」の周りを回ってみる。すると一見無造作に廃品が積み上げられた山と思われたものが、その起伏が規則的に配置されており、かつ全体と部分の起伏形状が一致している（対称になっている）ことに、アンジェラとロバートは気づく。

ギンズ：家の周りを進んできて、わたしたちはその南側に出てきました。Having made our way around the house, we are now on its south side.

ロバート：なんてこった！かなり大量の服が〔ゴミの山に〕投げ込まれているよ。手当たり次第にまとめられたのかな？おや、こちら側の積み上げられ方と、向こう側、つまり山の北側で服の山が積み上げられている仕方は同じかもしれないな。高さや深さは違うけど。How about that! A huge stack of clothes has been thrown together. Assembled randomly? But the way it's piled up here on this side seems to be identical to how it has been stacked up over there at the northern end of the heap. Heights and depths differ, though.

アンジェラ：反対サイドからだと、対称になっていることに気づけなかっただけなんだわ。家の周りを歩いてみてはじめて、わかったのね。この見晴らしのよい地点からなら、ずっ

10) *Architectural Body*, p.23

と多くのものがはっきりわかるわ。こちら側では、家にどのように日が当たっているか、北側のときは日が何を照らし出していたか、それによって気づくものが変わったのね We were simply unable to discern the symmetry from the other side. It was only once we had moved around it that... Our being able to make out so much more from this vantage point, do we chalk that up to how the light is hitting it on this side, to what a northern light brings to the fore?

ロバート：左側、それはたぶん西側だと思うけど、物の複雑な積み上げられ方が、山〔＝このゴミの山全体〕あるいは、この山を形作っている、南、つまり東側の山々にととても似ているんじゃないかな。あちらこちらにある尾根の形が決まっているってことがわかりはじめてきたよ。Could it be that the intricate way things are piled on the left side—the west, I guess—closely resembles the pile or piles giving it its shape on the right—the east? I am actually beginning to spot some defined edges here and there.¹¹⁾

廃品の山は、でこぼこ・起伏をもっている。その起伏を作りだしている一つ一つの山・谷もまた起伏をもっている。それらの形状が、全体と部分でシンメトリー（対称）になっているのである（これは、養老天命反転地やバイオスクリープハウスで実際に見ることのできる構造である）。

次にギンズとアラカワは、2人を室内へと案内する。ギンズが入り口と称した部分には、ドアマットや巨大なシャワーキャップのようなもの（大きなビニールシート状のものと思われる）が置かれていた。ギンズは、ロバートに、身をかがめてその下に潜り込むように促す。入室しようとして、手に取った入り口のシートの軽さに、ロバートは声を上げる。ギンズとアラカワは、それがアメリカ航空宇宙局NASAによって開発された新素材で、軽量であることはもちろん、防火性・防水性・断熱性を有し、折りたたむこともできると説明する。ロバートとアンジェラは、この家の中へ入っていく。彼らが部屋に入っていくには、物品を手足でかき分けていく必要がある。しかしそれは、自分たちが進んでいくスペースを確保するためではない。それによって部屋が成立するのである。

アンジェラ：わたしたちの動き方に応じて、部屋が形をもつんだわ。前屈みになると、部

11) *ibid.*, p.24、〔 〕内は引用者による補足。以下、同様。

屋がほとんどなくなってしまう。あなたのいる部屋をもう少し広くしてちょうだい Rooms form depending on how we move. If I bend down, I nearly lose the room. Would you open up the room a little more where you are?¹²⁾

身体をどのように動かすか、その仕方に対応して、部屋の形、広さ、使い勝手が変わっていくのである。われわれは、家や部屋という空間は固定的で（そもそも建築とは家の形・大きさ・目的を決定し、それを実現する作業と思われる）、そのなかでわれわれが活動すると考えがちである。しかし家や部屋という空間とわたしの動きは相互作用しているのである。ギンズ+荒川にとって建築とは徹底的に一時的 tentative である。

ここに、われわれにとって建築が意味しているものがある。すなわち、場所を保持するの
とに向けた一時的な構築である。Here is what architecture means to us: *a tentative
constructing toward a holding in place.*¹³⁾

建築は、一時的であり、流動的である。それゆえ、仮説なのである（『建築する身体』第3章のタイトルは「仮説としての建築」であった）。しかし「建築が一時的である」とは、何を意味するのだろうか。上の会話はあくまでもゴミの山（上述のように、それを模した最新の科学素材でできたものであったとしても）を家・部屋に見立ててのことである。これを理解する手がかりを、テキストの中で論じられている主張に求めてみたい。それは「有機体が人間になる」という主張である。

2 人を知ること、人となること。「人間となる有機体」

『建築する身体』第1章のタイトルは、「人間となる有機体 organism that persons」である¹⁴⁾。この語は、何を意味しているのだろうか¹⁵⁾。

12) ibid, p.27

13) ibid, p.23

14) 邦訳および先行研究では、この語は「有機体—人間」と訳され、すでに定着している感がある。ギンズ+荒川が用いている“organism that persons”というフレーズ内の person という語は動詞であり、that は関係代名詞であることを考慮し、本稿では「人間となる有機体」と訳出する。

15) 以下の論述の一部は、すでに拙稿において論じられている。詳細は、「コウモリになり、人間になる有機体—荒川修作、マドリン・ギンズ「天命反転」について—」『関西大学文学論集』第64巻第3号、2014年、1-28頁を参照されたい。

わたしたちは、「人間となる有機体 organism that persons」という明らかに気の利かない用語を採用した。なぜなら、人間とは、正真正銘の存在なのではなく、協調した形成の働きによる断続的かつ一時的な結果であることを、その語が言い表しているからである。この語を世に向けて公表したので、今後は、もう少しましな言葉を同義的に使おう。身体、身体そのもの、人間存在、有機体、有機体一人間、人間といった語である We have adopted the admittedly clumsy term “organism that persons” because it portrays persons as being intermittent and transitory outcomes of coordinated forming rather than honest-to-goodness entities; now that we have launched the term, we use the following less cumbersome terms synonymously with it: body, body-proper, human being organism, organism-person, person.¹⁶⁾

身体、身体そのもの、人間存在、有機体、人間といった語は、『建築する身体』においては“organism that persons”と同義であるとされている。したがってこれらの語で表されているのは、上記のテキストからすれば、一貫して、「協調して機能する形成作用によって断続的、一時的に生み出されたもの」ということになるだろう。身体や人間は、固定的、静態的なものではなく、流動的なものとして捉えられている。そのことを明確に表現するために、荒川+ギンズは、“organism that persons”の persons を動詞として使っている。

われわれが語っている有機体は、世界を人間化する。他のタイプの有機体は、世界を犬化、キリン化、あるいはゴキブリ化する The organism we are speaking of persons the world; other types of organisms dog, giraffe or cockroach the world.¹⁷⁾

「persons the world 世界を人間化する」とは「世界を、人間がそこで活動できる場所にすることを意味している。犬は、世界を犬が活動する場に、キリンは世界をキリンが生きる場所に。person, dog, giraffe, cockroach これらの語は、いずれも動詞である。われわれは「人間である」のではなく、世界を人間が活動できる場として意味づけることで、その意味づけの主体（有機体）は、人間になるのであり、その働きの絶えざる進行のうちで、その有機体は人間である、と言われる。それは一時的、断続的である。なぜなら、われわれはたえず「人間

16) *Architectural Body*, p.2

17) *ibid.*, p.1

になっていく」存在だからである。

建築は、「場所を保持することに向けた一時的構築」と定義されていた。世界を人間や犬やキリンがそれぞれ住まう場所にするために、そしてたえずそうした場所でありつづけ、そうした場所になっていくために、有機体は人間になり、犬に、キリンにならなくてはならない。

他者に人間として受け入れられた人は、実際、人間となる有機体が振る舞う一連の仕方に他ならない Who has been accepted as a person by other persons is really nothing more than the set of ways an organism that persons behaves.¹⁸⁾

身体を動かす。すなわち、人間が人間の行為を遂行するとき、世界を感じ、その世界は人間の世界となる。それが、有機体が人間となるということである。これは徹底的に流動的に感覚データのたえず変動として理解されなければならない。

自分たち自身を了解することには、何が感覚としてまとまるのかを確定することが含まれているにちがいない。しかし、感覚がどのように生じてきたのか、また何が感覚としてまとまっているのか、そのいずれも、感覚〔それ自身〕が決定することは、構造上、できないように思われる。というのも感覚は、世界〔としてまとまるもの〕以上の感覚を〔わたしたちに〕提供しているからである。感覚の粒子とは何であり、感覚の波とは何であるのか。何が世界として作動しているのか、それを解明するために、世界の外へと超え出すことはできない。なぜなら、世界はわたしたちが作りだしたもの、すなわち、わたしたち自身のことだからである。Figuring ourselves out must include determining what coheres as it. But sentience would seem constitutionally unable to determine either how it came about or what coheres as it; sentience always delivers more sentience as world. What are the particles and what are the waves of sentience? We cannot get beyond the world to find out what operates as it, because it is of our making; it is us.¹⁹⁾

行為とは、何かを感覚し、その感覚的内容を変化させていくことである²⁰⁾。感覚は、いつもわれ

18) *ibid.*, p.1

19) *ibid.*, p.xii

20) アフォーダンス理論の提唱者ギブソンによれば、例えば、水を飲むという行為は、ペットボトルの一定の知覚を作り出すことである。

われに過剰に与えられている。言い換えれば、感覚は、われわれが世界として捉える以上のものの感覚を提供している。例えば、鳴り響いているすべての音をわれわれは知覚し、ピックアップしているわけではない。物理的な強弱以外に、関心によって、音の一部だけを拾い出し、自分にとって有意義な音響世界を構成しているのである（後述するように、こうした働きこそ、世界の配置として、ランディング・サイトとギンズ+荒川が呼んだものである）。有機体は、環境の中で活動することによって、その有機体にとって有意義な（それは必要なもの、不必要なもの両方）感覚（内容）が統合されていく。そのとき、有機体は（例えば）人間となり、世界が人間化し、宇宙が人間の世界となるのである。

宇宙にざっと目を通すこと [= 宇宙を通覧すること] が、宇宙を世界にするのである Leafing through a universe turns it into the world.²¹⁾

以上をまとめよう。身体の動きに応じて、家・部屋が成立するという思考実験的な論述から、ギンズ+荒川は建築のもつ一時性を主張した。それは有機体が活動するなかで、たえず住環境が変化しつづけるというものであり、その流動的な活動のうちで当の有機体は、人間、犬、キリンといったそれ自身の存在になっていくのである。こうした側面を言い表す術語として、ギンズ+荒川が採用したのが、「人間となる有機体」であった。では、これと「建築する身体」はどのような関係にあるのだろうか。

人間となる有機体は、建築する身体への途上にある最初の一步である The organism that persons is the first step on the path to the architectural body.²²⁾

人間となる有機体として歩みはじめながら、よちよち歩きの幼児は、世界全体を、車輪付きのおもちゃ（建築する身体）のように、引きずっていくのである。The toddler, taking its first steps as an organism that persons drags its whole world along as pull-toy (architectural body).²³⁾

よちよち歩きをはじめた幼児、お気に入りのおもちゃに必死に手を伸ばす幼児、お腹が空いた

21) *Architectural Body*, p.9

22) *ibid.*, p.2

23) *ibid.*, p.3

と泣き出す幼児は、世界のうちに人間として生まれた。しかし彼女／彼は、そのまま人間なのではない。その一つ一つの振り舞い、行為を通じて世界を自らの生きる世界、人間の生きる世界へと「建築していく」ことを通じてはじめて、人間となる。それは、人間となる有機体が宇宙を（自らが生きる）世界へと変えていくプロセスなのである。人間となる有機体は、人間となり、かつ人間になりつづける。そのとき、人間は目まぐるしく変化していく環境を生成させる「建築する身体」となっているのである。

3 「天命反転」と「建築する身体」

以上のように確認してきた「建築する身体」という概念は、ギンズ+荒川において（それは当然荒川+ギンズでも）最も重要と思われる「天命反転」という主張に、どのように接続されるのかを見ていこう。

建築は、ただ生命のかたわらに立ち、生命と結びつけられるようなものと見なされているわけでも、生命が、何かのついでに、気軽に利用する建造物と見なされているのでもない。すなわち、受動的なもの、避難場所あるいは記念碑のようなものを提供するために、受動的に単にその場にとどまっているのではない。わたしたちが新たに心に抱く建築は、能動的に生死の問題に関与するのである。We see architecture not merely as that which stands by and gets linked up with, as structures that life lightly avails itself of in passing; not passive, not passively merely hanging around to provide shelter or monumentality, architecture as we newly conceive it actively participates in life and death matters.²⁴⁾

建築物は、われわれを厳しい自然環境から保護してくれる。雨に濡れること、強い日差しをうけること、屋根や壁はわれわれの柔らかで傷つきやすい身体を外的条件から守ってくれている。家の構造によっては、住人の生死が分かたれることもあるだろう。それゆえ建築とは、そこに住むものに役立ち、奉仕するものである。しかし上記引用にあるように、建築は、われわれに仕えるために受動的に待ち構えているものではない。むしろ、死という最大の危険を回避するものとして能動的、積極的に身体に関与してくるものである。ただし、ここで死の回避とは、上で述べたような自然災害などから命を守るということではない。ギンズ+荒川にとって、そ

24) *ibid.*, p.xi

れは「人が死ななくなる」ことを意味する。しかし、「われわれ人間は死ぬ」というのは、最も自明な事柄ではないだろうか。たとえば、哲学者キルケゴールにとって、死は実存という概念と結びつけられ、有限な人間の根本的なあり方と規定されてきた。またハイデガーは、主著『存在と時間』において、自己の終わりである死へ先行的に関わり向かう存在こそが、本来的な自己であるとして、それを先駆的決意性と捉えている。われわれ人間は死すべき存在、必然的に死ぬ存在ではないだろうか。だがギンズ+荒川は、これまでの哲学は「人間とは何か」という問いに対する説明に失敗していると批判する。すなわち、人間とはいかなる存在であるのか、われわれは何一つわかっていないのである。われわれが自分の存在が何であるのか理解もせずに、死ぬという運命を受け入れているのは、敗北主義を表明している。それゆえギンズ+荒川は「天命反転」を主張し、死に対して宣戦布告を行ったのであった。

死すべき運命〔を受け入れること〕は、何世代にもわたって人々を支配している状況であった。しかしこれは、いつもそうでなければならないということの意味しない。死すべき運命、すなわち不可避の窒息に対して、これまで向けられた抵抗はどれも、あまりにも断片的なやり方でしか行われてこなかった。人間が、疑問も抱かずに、自分自身の不可避の消滅を受け入れるように導く敗北主義者の態度から、自らを救い出すには、どのようにしたらよいのだろうか。——中略—— 死すべき運命に対抗する努力を、恒常的に粘り強く行い、総力をあげて取り組まなければならない。That mortality has been the prevailing condition throughout the ages does not mean it will always have to be. Any resistance mounted thus far against mortality, that ineluctable asphyxiator, has been conducted in too piecemeal a fashion. How can human beings rid themselves of the defeatist attitude that leads them to accept unquestioningly their own inevitable obliteration? The effort to counter mortality must be constant, persistent, and total.²⁵⁾

死すべき運命への対抗措置は、どのようになされるのか。それは、建築を媒介にして人間の概念を拡張し、作り直すことによってである。

本書が語っていく建築は、人類にとって手の届くものである。その建築は、人間という概念を、拡張し練り直すために解きほぐして、無効にするための一つの方法となるだろう。

25) *ibid.*, p. xv

The architecture we speak of in this book is within our species' reach. It will be a way to undo, loosening to widen and re-cast, the concept of person.²⁶⁾

天命反転とは、人は死ななくなるというギンズ+荒川の最も重要な概念である。しかし、われわれの「常識」は、また実存主義哲学も、人は死ぬものであり、また死ぬからこそ人間存在なのだと考えている。しかしギンズ+荒川によれば、われわれ人類は、自分たちおよび世界のことをわかっていない。探究の途上にある。したがって、今の常識で人間が死ぬとされていても、そう決まっているわけではない。人間についての認識、人間や世界に関する価値観が変化することで、人間は死なないと確信できるようになるかもしれない。こうした認識を獲得するための努力を開始することが、敗北主義に対する抵抗なのである。常識を打破するこの戦いの手がかりは、建築であり、また「建築する身体」である。

建築は、人類が自らを了解すること、自分たちをさまざまに異なる仕方で構築していくこと、そのどちらに対しても利用できる最高の道具である。Architecture is the greatest tool available to our species, both for figuring itself out and for constructing itself differently.²⁷⁾

建築物は、人間に役立つさまざまなものを提供する。そしてそのサービスが最高度に達したとき、人間に、思ってもみなかったこと、これまで期待すらしなかったことを与える。死の回避である。

最高レベルで身体に役立つとは、身体が期待しているものだけでなく、それ以上のものをも提供することが含意されているだろう。身体に要求されているのは、自らの死を回避することである。身体に対して〔期待以上のものを与える〕物惜しみしない建築、健気にも身体が必要としているものすべてを供する建築は、死の回避〔を提供すること〕をも、自らへの要求と受け取るに違いない。Serving the body to the nth degree will include as much as the body bargains for and more. It is mandated for the body that it fend off its own demise, and an architecture that would be unstinting toward the body, that

26) *ibid.*, pp. xi-xii

27) *ibid.*, p. xx

would slavishly deliver up to the body all that it would seem to need, must take this as its mandate too.²⁸⁾

建築が、これまででは考えられないレベル、最高のレベルで人間に奉仕するとき、まったく新しい人間概念が創出され、まったく新しい人間が出現する。それは、死を回避する（死なない）ことになった人間である。これによって、天命反転という事態が達成されるのである。ギンズ+荒川は建築によって、天命反転を実現しようとした。だがこの建築は、ただ住居や施設を意味しているのではなく、身体との相互作用を含意した「建築する身体」のことである。水という媒体は、われわれが泳ぐことを可能にし、また地面の抵抗は、われわれに歩行をもたらす。環境は、そしてその中の一つである建築は、われわれ人間に対してさまざまな行為を可能にする媒体なのである。前述のように、「人間となる有機体」は「建築する身体」と不可分である。行為を通じて、有機体が人間となり、人間が生きる世界が成立するからである。行為の仕方が異なれば、有機体が生成する仕方も異なり、いかなる存在といかなる世界が成立するかに影響を及ぼす。われわれのこれまでの常識からすれば人間を超えた存在 transhuman と呼ばれる存在者が、環境との相互作用の中で遂行される行為のうちで登場してくる。天命反転を可能にするのは、「建築する身体」による新しい世界と人間の創造なのである。

以上、天命反転という主張と「建築する身体」という概念がどのように結びつくのかを、『建築する身体』にもとづいて論じてきた。最後に、同書で述べられているギンズ+荒川の独特な概念「ランディング・サイト」について、検討していくことにしよう。

4 ランディング・サイトとはいかなる事態なのか

ランディング・サイト Landing Sites (降り立つ場) とは、何を意味しており、それは、「建築する身体」や天命反転とどのように関係している語なのだろうか。この語はもともと、80年代後半から荒川+ギンズが制作したインスタレーション作品の解説文やその作品名に用いられていた。「知覚の降り立つ場」と訳された Perceptual Landing Sites というインスタレーションは、木製の八角形の箱と、同じく八角形のゴム製の垂れ幕からなる構造物から構成されている。図録解説には「ひとつは開かれ、もうひとつは閉じられた装置である。そこに実際に入り込んで、その空間に生起する知覚が装置へと投影されることによって、知覚やイメージと同時に空

28) *ibid.*, p. xi

間そのものの形成が〈感じられる〉ように仕組まれている」とある²⁹⁾。おそらく作品を体験する人は、ゴム製の垂れ幕をくぐって内部へと入り込むことで（これは本稿第1章でも取りあげた『建築する身体』第3章のアンジェラとロバートの記述を想起させる）、自身の身体を通じて知覚と空間の形成を直接身体的に感じるようになるだろう。しかしこうした事態を荒川+ギンズ（あるいはギンズ+荒川）は、なぜランディング・サイトと名づけたのだろうか。

配置されるものがなにもなければ、いかなる世界も生じることはないだろう。何が配置されているのか、誰も答えることはできない。配置されている最中のものは、ランディングのプロセスのうちにある。Were nothing being apportioned out, no world could form. What is being apportioned out, no one is able to say. That which is being apportioned out is in the process of landing.³⁰⁾

上記のテキストによれば、ランディング（降り立つ）とは、配置する apportion out ことであり、ランディングする働きを通じて何かが配置されることで、世界が成立するのである。ギンズ+荒川は、「配置する」の同義語として、「割り当てる assign」「場に就かせる field」「登録する register」「配分する distribute」などの語を用いているが、これらはいずれも、ランディングのことを意味していると考えられる。前章で確認したように、人間となる有機体は、行為を遂行することで人間となり、環境（宇宙）は人間が生きる世界となるのであった。したがって、「ランディング」という概念をより明確に言い換えるならば、それは、人となる有機体が身体的な行為によってさまざまな場所を人間の世界として意味づけることなのである。人は世界という場に降り立つ（着地する）。そしてそこで人間としての活動を継続していくのである。sites は、場所・領域・フィールドのことであり、何らかの意味をもった場・活動空間となる。

人間は、どの瞬間においても、世界をランディング・サイトの特定の配分へと分解して記述する。もっと正確に言えば、有機体—人間—環境が、こうした配分にもとづいて記述される〔以下、省略〕。A person parses the world at any given instant into particular distributions of landing sites, or better, an organism-person-environment can be parsed into these distributions; …³¹⁾

29) 塚原史『荒川修作の軌跡と軌跡』NTT 出版、2009年、125-130頁参照。

30) *Architectural Body*, p.5

31) *ibid.*, p.6

人間主体が世界を意味づけ、世界を成立させるという主張は、西洋哲学においては、一部の観念論や現象学において共有されるものである。すなわち、あらかじめ世界・環境が独立した実体的存在者としてあり、そのなかで人間を含むさまざまな存在者が活動するという実在論を否定する考え方である。何らかの認識主観が、主観的な作用を遂行することで世界が存在しはじめるとするか、もしくは相互作用がはじめに生じ、その後、いわゆる主観と客観、人間と世界が成立するといった主張である。しかしギンズ+荒川のテキストを丹念に見ていけば、ランディング・サイトは、単なる世界の意味づけ作用のことでないのがわかる。

ランディング・サイトという概念を理論仮説として採用したので、〔それを用いて〕わたしたちが明らかにしようと試みるのは、別の場合には隠されたままになっている、意識の明確な不変の特徴である。すなわち、すべての物ごと、出来事は、特定の位置づけをもっているという特徴である。人間が相互作用している世界を形成するために思考—感情をどのように配置しているか、その跡を追い、場所化された意識を人間の周りいたる所に「設置する」〔設置すると同時に、意識をさまざまな場所へ分散させる〕と考えることが妥当であるかどうかを知りたいと思い、わたしたちはランディング・サイトという図式的な領域を確立する。Adopting as a theoretical posit the concept of a landing site, we seek to make and keep explicit an otherwise hidden-in-plain-sight constant of awareness: all things and events have specific positionings. Intent on tracking a person's apportioning out of thinking-feeling to form a world that she then interacts with, and wondering whether it is at all valid to think of a "depositing" of sited awareness everywhere around one, we establish a schematic domain of *landing sites*.³²⁾

われわれが何かを、例えば富士山を思い浮かべるとしよう。その際注目されているのは、雄大な山裾の広がり、冠雪した頂上付近など、富士山そのものの視覚的イメージだろう。しかしそのイメージはかならず一定の位置を有している。その位置は、物体や出来事に備わっている内在的な要素とともに、物体や出来事の意味、すなわち環境の意味を規定するのである。すなわち対象が何であるかは、対象の本質的な内実とともに、それがどこにあるかによっても規定されるのである。富士山がどこに見えているのか、どのような方向からイメージされるのかで、富士山の意味は変わり、それにかかわるわれわれの行動可能性もまた変化する。

32) *ibid.*, pp.6-7

「人間が位置づけられているのならば、なぜ哲学者たちは、人間が何であるかを探究する際、あるいはさらに言えば、心の本性を探究する際、これ〔位置づけられていること〕がその要因としてこれまで考慮されてこなかったのは、またあったとしてもめったになかったのは、どうしてなのか」「人間を場所として考察する哲学者がいたなら、彼らは人間——建築学を作り出さなければならなかつただろう。言にくいことだが、彼らは〔哲学者を辞めて〕こうした種類の建築家にならなければならぬのである」“If persons are sited, why do philosophers inquiring into what constitutes a person, or, for that matter, into the nature of mind, rarely, if ever, factor this in?” “Philosophers considering persons as sites would be obliged to develop a person architectonics. They would, I am afraid, have to turn themselves into architects of sorts.”³³⁾

哲学は、人間およびその心的作用が位置づけられていること、場所化されていることを探究しなければならぬ。そしてそれこそが、ギンズ+荒川が「建築する」という働きを重視する理由になっていると思われる。というのも、建築とは、住空間を構成するパーツの配置を考え、それを実現していく一連のプロセスだからである。世界が有機体にとって意味ある場として立ち現れてくる事態、その内実を考察するために、「ランディング・サイト」という術語が導入されたと言えるだろう。

では、人間という有機体の世界は、どのようなランディング・サイトによって立ち現れてくるのだろうか。ギンズ+荒川は、三種類のランディング・サイトを挙げている。知覚するランディング・サイト perceptual landing site、イメージ化するランディング・サイト imaging landing site、次元化するランディング・サイト dimensionalizing landing site の3つである³⁴⁾。簡単にテキストの該当箇所をふまえて見ていこう。知覚するランディング・サイトは、その名の通り、知覚するという働きによって、世界を意味づけ、場所化していく。ここに椅子があり、

33) *ibid.*, pp.5-6

34) これまで、perceptual landing site は「知覚のランディング・サイト」ないし「知覚の降り立つ場」、imaging landing site は「イメージのランディング・サイト」、dimensionalizing landing site は「ランディング・サイトの次元化」と訳され、それがある程度、定着していると思われる。しかし本稿では、「知覚するランディング・サイト」「イメージ化するランディング・サイト」「次元化するランディング・サイト」と訳出している。Architectural body が「建築する身体」と訳されていることから（特に荒川がそう訳すように指示したとのことであるが）わかるように、荒川+ギンズは、行為や作用をたえず強調する。そして『建築する身体』では、知覚するという働きによって、世界を意味づけ、配置することが perceptual landing site の意味するところであるがゆえに、ここでは「知覚するランディング・サイト」、「イメージ化する」「次元化する」と訳すことにした。

その向こうに机があり、机の横には本棚がある…というように。

部屋に入ったとき、人はその部屋の特徴を記録するために、知覚するランディング・サイトを分散させはじめる。Upon entering a room, a person begins dispersing perceptual landing sites to record its features.³⁵⁾

また、この知覚するランディング・サイトは、必ずしも視覚だけでなく、触覚、聴覚、自己固有受容感覚、運動感覚などが複合的に絡み合って機能する。したがって成立してくる世界もまた多重感覚的なものなのである。一般に知覚は、多くの情報をきわめて明瞭に提供する。世界の大部分は知覚するランディング・サイトによって与えられるとわれわれは言いたくなる。しかし、ギンズ+荒川にとって、知覚するランディング・サイトに劣らず重要なのが、イメージ化するランディング・サイトである。

知覚するランディング・サイトによっては把握されない領域、いかなる意識の焦点もしくは着陸地点も与えられない領域は、単に空白でも、消えているのでもない。その代わりに、そうした領域、焦点が合わせられずぼんやり見えている領域は、図から抜け落ち、図のなかに大きなすき間を作っているわけでもなく、イメージ化するランディング・サイトによって、たえず供給され、下書きされ、〔知覚に〕似せられているのである。An area not captured by perceptual landing sites, accorded no points of focus or touchdown points of awareness, does not simply go blank or vanish; instead, it—a looming non-focused-upon area—far from bowing out of the picture or leaving great gaps in it, gets continually supplied, or roughed in, or approximated, by imaging landing sites.³⁶⁾

物理的な事情（離れている、他のものと重なっている…）によって、知覚できない部分が存在する。しかし、そこは何も存在しない空白の場所ではない。見えてはいないが、おそらく〇〇が存在している。触ることはできないが、おそらく〇〇な感触があるといった具合に、われわれはイメージ化することでそれを補う。知覚された領域とイメージ化された領域が相互補完することによって、世界は成立する。わたしにとって見えている部分は、世界の現実性・現実感

35) *ibid.*, pp.17-18

36) *ibid.*, p.12

を提供するが、それは世界のごく一部でしかない。世界はわたしが今まで経験したことのない場所、状況を含めて世界なのである。わたしがそうした認識を獲得できるのは、与えられた現実を超えて、世界を拡張的に捉えるイメージする働き、イメージ化するランディング・サイトのおかげなのである³⁷⁾。そして知覚とイメージ化の複合からなるランディング・サイト、次元化するランディング・サイトは、われわれに世界の奥行きを提供する。

人間は場所だけでなく、奥行きをも経験する。わたしたちはこの事実を認めるので、複合的なランディング・サイト（知覚するとイメージ化すると名づけていた二つのランディング・サイト「原子」からなるランディング・サイト「分子」）を設定する。次元化する〔立体的に示す〕ランディング・サイトは、身体に相対的な場所と位置を登録する。Acknowledging that a person experiences not only sites but also depths, we posit a composite landing site (a landing-site “molecule” formed of the two landing-site “atoms” we have named perceptual and imaging). A dimensionalizing landing site registers location and position relative to the body.³⁸⁾

膨大な感覚の多様から、特定の仕方で感覚がピックアップされ、それがイメージ化と次元化の働きを介して配置される、すなわちランディングされる。そのとき、世界が成立する。ランディング・サイトとは、有機体が有する「建築する身体」の働きを記述するための概念なのである。

結びに代えて 『建築する身体』のさらなる読解のために

以上、『建築する身体』にもとづき、「天命反転」「建築する身体」「ランディング・サイト」というギンズ+荒川の独特な術語に対して、いわば「注釈を付ける」作業を行ってきた。これは、冒頭で述べたように、『建築する身体』をわかりたい人のために、読解ガイドを提供する意図から行われた。しかしここで扱われたテキストの分量は4分の1程度であり、この後も引きつづき「バイオスクリープ」「手続き的建築」「クリティカル・ホルダー」といった重要概念に関する解説的考察が必要であろう。それに関しては稿を改めて取り組むことにしたい。

37) 『建築する身体』においてギンズ+荒川は、難解なポリオミノパズルを解いた盲目の数学者カール・ダルクのイメージ化能力を事例にして、イメージ化するランディング・サイトを詳細に記述している。それに関しては稿を改めて論じることにしたい。

38) *ibid.*, p.21

なお、本稿註9においてすでに言及しているが、この考察はギンズ+荒川（あるいは荒川+ギンズ）を徹底的に論理的、合理的に読み解こうとするものである。テキスト全体を通じて、一貫した理解を提示しようと試みる。ただし、それがギンズ+荒川のすべてであると主張する意図はない。彼らは、論理的なものをやすやすと超えてみせる内容をもっていること、そしてそれが非常に魅力的であり、可能性を秘めたものであることに異論はない。だとすれば、本稿を手はじめに今後継続しようとしている考察は、何のためになされるのかという疑問をもたれるかもしれない。ギンズ+荒川が何度も説いていたように、われわれ人類は、自分たち人間がどのような存在であるのか、わかっていない。同じように、ギンズ+荒川が論理的理解を超えて、芸術・科学・哲学の新たな可能性を提示する作業をしていたことをわれわれは目の当たりにしていても、実のところ2人の主張が何であるのか、わかっているのだろうか。

死すべき運命に対抗する努力を、恒常的に粘り強く行い、総力をあげて取り組まなければならない。The effort to counter mortality must be constant, persistent, and total.³⁹⁾

ギンズ+荒川の思想を理解すること、そして理解するだけにとどまらず、その可能性を最大限に引き出し、彼らがやろうとしたことを引き継ぐこと、われわれは、そのための努力を恒常的に粘り強く行い、総力をあげて取り組まなければならない。本稿は、そのためのわずかではあるが、第一歩なのである。

引用および参考文献

Madeline Gins and Arakawa. *Architectural Body*. Tuscaloosa: University of Alabama Press, 2002.

邦訳：『建築する身体 人間を超えていくために』河本英夫訳、春秋社、2007年。

荒川修作「インタビュー 死なないために」『水声通信 荒川修作の〈死に抗う建築〉』2005年11月号、水声社、2005年、24-38頁

荒川修作+マドリン・ギンズ『死ぬのは法律違反です—死に抗する建築 21世紀への源流』河本英夫、稲垣論訳、春秋社、2008年。

『三鷹天命反転住宅 荒川修作+マドリン・ギンズの死に抗する建築』水声社、2008年。

マドリン・ギンズ+荒川修作『ヘレン・ケラーまたは荒川修作』渡部桃子監訳、新書館、2010年。

稲垣論「絶えず別様の仕方で：荒川修作と創造する環境」、『エコ・フィロソフィ研究』5号、2011年、93-103頁

稲垣論『リハビリテーションの哲学あるいは哲学のリハビリテーション』春風社、2012

稲垣論「絶えず別様の仕方で：荒川修作と創造する環境」、『エコ・フィロソフィ研究』5号、2011年

門林岳史「ヘレン・ケラーになるために—荒川修作と共感覚」、北村紗衣編『共感覚の地平—共感覚は

39) *ibid.*, p. xv

- 共有できるか?』電子書肆さえ房、2012年、48-55頁
- 三村尚彦「コウモリになり、人間になる有機体—荒川修作、マドリン・ギンズ「天命反転」について—」
『関西大学文学論集』第64巻第3号、2014年、1-28頁
- 佐々木正人・村田純一・河野哲也・染谷昌義編『知の生態学的転回』第1巻 身体、第2巻 技術、第3巻 倫理、東京大学出版会、2013年
- Gendlin, E.T. (2013). Arakawa and Gins: the Organism-Person-Environment Process, in Keane, J. and Glazebrook, T (Eds.) *Arakawa and Gins Special Issue of Inflexions Journal*, No.6: 225-236
- 塚原史『荒川修作の軌跡と奇跡』NTT出版、2009年。
- 山岡信貴『死なない子供、荒川修作』(DVD) 製作: ABRF、制作: リタピクチャル、2010年

[付記] 本論考は、東西学術研究所身体論研究班研究例会(2016年7月14日、関西大学)での口頭発表: 「建築する身体」の現象学—「天命反転」と「建築する身体」のつながり—を加筆修正したものである。